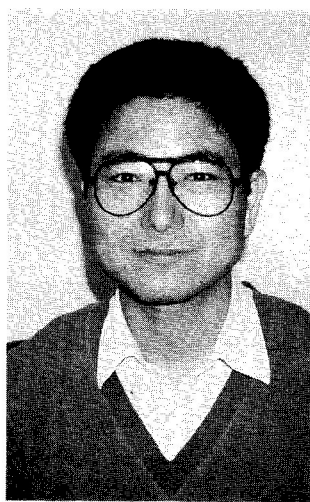


仕事にとどまらぬ連携を

「じぎようだん」編集長 松沢 常夫



「労働の主人公」をめざして

昨年からうちの担当になった営業の林貴子さん、以前はずいぶんきびしい感じの人だったように思いますが、うちからの仕事之急カーブで伸びているせいか、最近会うと、いつもホクホク顔。

なにしろ、月二回刊、タブ四ペー



ジの「じぎようだん」新聞だけのおつきあいだったのが、昨年六月から新聞は八ページに倍加。季刊誌「仕事の発見」も別の印刷所から移してきて、今年に入ってからにはポスター五点、チラシ三種類、営業パンフ、ブックレット八冊など、たてつづけをお願いしているのですから。もっとも、現場の皆さんには、相当地な無理難題をもちこむことにもなっていると思いますが、いいものを

から仕事をだしてもらおうときの受け皿でした。この事業団が各地にでき、全国組織をつくったのが十年前。その機関紙として「じぎようだん」新聞が月刊で発行されたのがあかつき印刷のおつきあいの始まりでした。その後、事業団の民間の仕事も開拓し、全国連合直轄のセンター事業団をつくりあげていくなかで、「労働者協同組合」という発展方向を明

確にします。多くの労働者は、もうけ主義企業を批判しながらも、結局は、そこに「よりよく雇われる」ための競争をするしか生きていく道はない、と思いきまされてきました。

しかし事業団は、労働者が自ら出資して企業を運営し、協力し助けあって働き、労働の主人公となって生きていく道があるはずだ、と考えました。そのことができなくては、労働者が主人公となる世の中などとうてい望めないとい。

この実践は各地の生協、民医連などと提携するなかで着実に成果をあげ、争議から始まった労働者の自主管理企業などとともに、労働者協同組合グループを結成しようといところまできました。事業内容もビルメンテナンスから、最先端技術を駆使するものにまで広がりが、この五月には労働者が協同したら何が可能になるかを語りあう「いま「協同」を問う集会」が一千人をこす規模で開かれようとしています。あかつき印刷のおつきあひも、ますます多面的に拡大すると思います。印刷の仕事を通じてというのはもちろんですが、それにとどまらない連携をと願っております。